遺跡・考古学からのランドスケープ研究

Landscape Studies based on the Archaeology

小野 健吉* Kenkiti ONO

はじめに

ランドスケープ研究において考古学の成果をいかに利用するか。また一方、ランドスケープ研究が考古学に対して何をなすうるか。この二つのことがらは、考古学を主な研究対象とする研究機関に在籍しているランドスケープ研究者として、日常的に関わらなければならないテーマである。

前者、すなわち考古学の成果を利用することの恩恵を最も受けるランドスケープ研究の分野は庭園史であり、後者、すなわちランドスケープ研究が考古学に対して具体的なかたちで寄与できるのは遺跡修景の分野であろう。

1. 庭園史研究

(1) 庭園史研究における発掘庭園の位置

明治時代以来、日本庭園史の研究方法としては、文献史料・絵画資料によるものが主流を占めていた。そして、それらに加え現存する古庭園（以後「伝世庭園」という。）や廃絶した古庭園の遺存地割の地形実測を有力な資料とする研究方法が森蘊らによって用いられ、庭園史研究をより実証的なものへと導いたことは今さら言うまでもないだろう。

1970年代以降、埋蔵文化財の発掘調査件数の飛躍的な増大等によりこうした従来の庭園史の研究方法とは異なった研究方法が可能になった。庭園遺跡の考古学的発掘調査の成果を取り入れる方法である。発掘された庭園遺跡（以下、「発掘庭園」という）は、庭園史研究に対して一級の資料を提供する。それは、発掘庭園が埋まった時点での状況をそのまま保存した状態で出土するからである。もちろん、庭園の重要な構成要素である植物は一部に遺体をとどめるだけで失われている。しかし、地割や石組など庭園の骨格は変化することなくその形をとどめているのである。この点において、発掘庭園は、長い年月のあいだに自然的・人為的变化を受け続けることの多い伝世庭園よりも、庭園史研究に寄与するところが多い。換言すれば、発掘庭園は、その属する時代の庭園の基準資料となりうるのである。

具体的な例をあげてみよう。まず、平城宮東院庭園と平

城京左京三条二坊六坪宮跡庭園。奈良時代に属するこの二つの発掘庭園は、『続日本紀』『万葉集』『懷風藻』等の文献あるいは正倉院の〈麻布山水図〉や〈仮山〉といった伝世工芸品によっておぼろげにうかがい知ることができるにすぎなかった当時の庭園の姿を白日のもとに明らかにするものであった。また、ここ10年間で最も注目を集めた事例のひとつに、1991～2年に発掘された三重県上野市の城ノ越遺跡がある。文献史料の全くない4世紀後半にまでさかのぼるこの遺跡は、出土遺物などから祭祀遺跡であると結論づけられている。しかし、石張の流路や流路交点付近のテラス周辺に見られる立石など、形態的には庭園を想起させる遺構を含み、庭園史研究に大きな課題を投げかけた。

他にも古代から近世まで発掘庭園の庭園史研究に対する寄与の例は数多く、いまや庭園史研究における不可欠の材料となっているといっても過言ではない。そして、今後とも、さらにその比重が増大することが予想される。

(2) 発掘庭園に関する情報の収集と整理

発掘庭園の成果をいかにスムーズに庭園史研究にとり入れていくか—このことが今後の庭園史研究にとって重要な課題となる。

まず、行わなければならないのは、これまでの発掘庭園に関する情報の収集である。前述したような顕著な発掘庭園の場合は、庭園史研究者にも情報が入りやすい。しかし、全国で行われる膨大な数の発掘調査の中からそれほど顕著でない発掘庭園に関する情報を抽出することは容易ではない。したがって、庭園史研究者の目にふれることなくねむっている情報は少なくないはずである。しかも、こうした情報のなかには庭園史研究にとって重要な意味をもつものが含まれている可能性も少なからずある。こうした情報を含めて、発掘庭園に関するあらゆる情報を収集・整理し、データベース化することは今後の実証的な庭園史研究にとって不可欠である。そして、ひとたびデータベース化が完了すれば、以後は新たな発掘庭園に関する情報をこのデータベースに集積することによって、考古学の成果を庭園史研究に

*奈良国立文化財研究所

円滑に援用することが可能となるわけである。

(3) 発掘庭園データベース

奈良国立文化財研究所では、現在、全国で約200件の発掘庭園をリストアップし、発掘庭園のデータベース化に取り組んでいる。このデータベースが現時点で完成した後に行わねばならないことは、庭園史研究者が利用可能なかたちでこれを提供すること及び新たな発掘庭園の調査成果を遺漏なくこれに加えていくことである。後者については、各都道府県に庭園史研究者による情報収集のネットワークをめぐらせることがぜひとも必要であると考えている。

2. 遺跡修景

(1) 確保された遺跡空間

現在、国指定の約1,300件をはじめ各自治体指定を含めれば一万数千件の指定史跡がある。これらの指定史跡の中には、関係者の保存運動の結果、保存・指定に至った遺跡も少なくない。これら法的に保護の対象となっているものをはじめとして、遺跡空間は、アイデンティティのある空間として、高いポテンシャルを有している。遺跡修景とは、こうした遺跡空間をいかに修景していくかという研究であり、計画であり、設計・施工である。

(2) 従来の遺跡修景の評価

わが国の遺跡修景では、各種の遺構展示手法を組み合わせ、発掘調査の成果を具体的に視覚化するのが通例であった。対象とするのが遺跡の保存・活用を目的として確保されたオープンスペースであることを考えると、遺構展示を中心とするこうした修景は、その意味で当然であり、遺跡の内容を来訪者に示す点で一定の役割を果たしてきたという評価に異論はなかろう。

巨大前方後円墳を葺石におおわれた築造当初の姿に復原し、一般の人々の古墳に対する認識を一変させる手法を用いた五色塚古墳（神戸市）。建物の柱を円柱形の刈込みで、築地塀を生垣で模式的に表現するなどさまざまな遺構展示手法を用いた平城宮跡（奈良市）。保存科学や建築史学など隣接分野との協業によって、奈良時代の庭を建物とともに再現した宮跡庭園（奈良市）。これらは、すぐれた遺跡修景として、後続に影響を与えたものといえよう。また、ここ10年間の遺跡修景を考えるうえで忘れてならないのは、1989年から始まった文化庁による史跡等活用特別事業、通称「ふるさと歴史の広場事業」である。この事業は、建物等の実物大復原・遺構露出展示施設などを内容とし、従来より立体的・視覚的で理解しやすい空間造りを目指したもので、活用面も含め大きな成果を上げている事例も多い。しかし、この新事業によるものの一部も含めて、いま各地

主要文献

- 1) 榎原考古学研究所編(1990): 発掘された古代の苑池, 学生社
- 2) 京都市文化観光局編(1990): 京都市文化財ボックス第5集・

の遺跡修景整備例を見ると、魅力的な空間となっているところが必ずしも多くないことに気づく。どうしてか。

まず第一の原因として、発掘調査成果の細部にとらわれすぎ、各種の遺構展示を羅列した説明的な空間造りがなされていることがあげられる。第二に、遺構展示手法の陳腐化。その遺跡の独自性や立地条件を考慮することなく、他の同種の遺跡の修景整備でなされた手法を引き移している例がまま見られる。第三は、維持管理・運営の不十分さであろう。適切な維持管理手法、運営体制、予算措置等が確立されていないことにより、すぐれた修景整備がなされているにもかかわらず、魅力を減じていることも少なくない。

(3) ランドスケープアーキテクトの役割

このような問題点を解決し、保存された遺跡を魅力的な空間としていかに再生していくか。その答えは、もとより一般論でひとくくりにできる性質のものではない。一口に遺跡と言っても、その特質や立地、周辺的环境等はきわめて多様だからである。しかし、一つの方策として、遺構展示に固執する姿勢を改めることが有効なケースも多いのではないかと個人的には考えている。すなわち、遺跡と共にその地の歴史性の本質を十分に理解したうえで、それらをモチーフとした魅力的な空間を創造し育成していくといった方向への転換である。もちろんその中で各種の遺構展示が一つの重要な要素であることは変わらないが、あくまでも歴史性をそしゃくしたうえでの遺跡全体のデザイン、しかも完成後の運営まで含めたデザインを念頭に置く。そう考えると、遺跡修景の分野へ積極的に関与しなければならないのは、まさにランドスケープアーキテクトではないか。

ランドスケープアーキテクトが遺跡修景に主体的に関わるにあたっては、遺跡というものの基本的な性格をおさえたうえで、これまでの事例を総括する必要がある。また、遺跡修景が考古学的発掘調査の成果を示す最終段階であり、その良否が一般の人々の考古学に対する認識に影響を及ぼすという点で、考古学に対しても責任を負わなければならない分野であることも肝に銘じて置かねばならない。さらに、考古学のほか歴史学・建築史学・都市計画学・保存科学など関連する他分野との連携をとることも不可欠である。

これまで遺跡修景に関わるランドスケープアーキテクトは少数であった。しかし、以上のようなことがらを踏まえたうえで、より多くのランドスケープアーキテクトが遺跡修景に主体的に関わるようになれば、遺跡空間がより豊かなものとして再生されることは明らかであろう。そして、そのことは、とりもなおさず、国土空間全体の豊かさにも寄与することにほかならない。

京都の庭園, 京都市

- 3) 奈良国立文化財研究所編(1982~87): 遺跡整備資料I~VI, 奈良国立文化財研究所